西鶴　思想と作品　目　次

第一部　西鶴文学の概観……1
西鶴の人と作風……3
一　芭蕉と西鶴……3
二　ユーモアと批判精神……10
三　人間と人生への関心……19
四　視野の広さと合理性など……29
五　美意識……39
西鶴文学の特徴……50

第二部　思想と作品……59
西鶴の旅とは何か……61
筍殺人事件考――西鶴における怪異と人間――……85
一　化け物と人間……85
二　化け物論の先例……90
三　筍殺人事件……96
四　異空間への旅……106

『懐硯』序説……113
『懐硯』再考――『近代艶隠者』との関連で――……122
荒砥屋について……144
小編三題……149
一　「春琴抄」と西鶴の作品……149
二　「青頭巾」と西鶴の作品……155
三　韓国女流詩人の作品について……163
不易と無限――『荘子』と芭蕉・西鶴――……168
序……168
一　「造化」と芭蕉・西鶴……169
二　寓言説を中心に……181
三　展開　Ⅰ――芭蕉の場合……194
四　展開　Ⅱ――西鶴の場合……210
五　『荘子』と近現代の思想……232
あとがき……243

第一部　西鶴文学の概観

西鶴の人と作風

一　芭蕉と西鶴

西鶴は近世、つまり江戸時代を代表する小説作者として知られていますが、本来は俳諧師だったのです。大阪では活躍いたしましたが、その素性などは余りよく判って居りません。その点、二歳年下で江戸で活躍した芭蕉の方が俳諧師として有名であり、素性や経歴も詳細に知られて居ります。

西鶴も芭蕉も談林俳諧から出発しました。俳諧について簡単に説明しておきますと、これは俳句の母胎ではありますが、現在の俳句そのものではありません。中世に盛んであった連歌は、もとは五七五七七の和歌の上の句下の句を別の人が作ることから始まったのですが、この二句だけに終らず、下の句の七七に五七五、その五七五に七七という風に次々と続けていって、百句で完結するのを百韻と名付けたものです。（最初の五七五を発句と言い、これだけを独立させて明治以降作られるようになったのが俳句です。）内容は勿論芸術的に美しいものが主流で、他に機知を弄した面白おかしい性格のものも作られました。例は省略しますが、俳諧は後者の系統を引くのです。俳諧とは本来滑稽という意味で、「俳諧の連歌」というべきものを、ただ「俳諧」とだけ言うようになったのですが、江戸時代には和歌的傾向を残したのを貞門の俳諧、そうでないのを談林俳諧と呼び、後者が盛んになりました。西鶴も芭蕉もこの辺りから